
君と行く明日。

和田梨樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と行く明日。

【Zコード】

N1724B

【作者名】

和田梨樹

【あらすじ】

ある日、僕は彼女に会った。その彼女に僕は恋をした。これがすべての始まりだった…

第一話 彼女と僕（前書き）

現在、色々なジャンルで書いています。読んでいただければ幸いで
す。

第一話 彼女と僕

僕は思う。あの時、彼女に出会わなかつたら、今の自分はいなかつたと。

彼女がいなければ、僕は僕でいられなかつた。

人が聞けば、大げさな話だと思うかもしれない。だが少なくとも、僕にとつてはそうではなかつた。そう、あれは1ヶ月前のことだ……

その日、僕は真夏の太陽の下を自転車で疾走していた。別に用事があつたわけではなく、ただいい天気だつたから、僕はなんとなく、午後から愛車に乗り、そこらをうろついてみようと思つたのだった。

ここは井坂町に流れている侘島川たしまの河川敷である。この川は長く、河川敷もそれだけ続いている。だから、ジョギングをする人や、僕のようにサイクリングを楽しむ人が、この河川敷には多く訪れる。

一番軽いギアで走つてゐる僕は周りを見渡した。川はゆっくりと海に向かい流れている。周りには犬の散歩をしている初老の男性や、元気にはしゃいでいる子供達。それに……？
僕はブレーキをかけ、自転車を停止させ、そして先ほど気になつた人をもう一度見る。

舞を舞つてゐる少女が、そこにいた。

彼女と僕の距離は10メートルほどだろうか。少々遠いが、舞つてゐる彼女は美しく見えた。

僕は近づいてみることにした。もつと近くで、彼女の舞が見たかつたのだ。

僕は5メートル程まで近づく。彼女は舞に集中していく気づかないので、ただ一心不乱に曲に合わせ舞っていた。曲は日本舞踊なのだろうか、琴のような音が、河川敷の限られた空間に響いていた。僕は近くのベンチに座る。そして彼女に見とれていた。

曲が終わる。彼女はふうっと息をつくと、こちらを見た。彼女は驚いているようだ。それはそうだろう、見知らぬ男がベンチに座り、自分の舞を見ていたのだから。

僕は拍手をした。彼女の舞を心から素晴らしいと思ったからだつた。僕は口を開く。

「綺麗な舞を見せてくれてありがとう」

彼女の顔が赤くなる。僕はそんな彼女を、かわいいと素直に感じた。

「へえ、お嬢様なんだ？」

「そう言われるのは、好きじゃないんですけど……まあ、その通りです。」

あれから。僕と彼女は雑談をしていた。彼女の名前が、島津麻里しまづまりといふこと。彼女が僕の一歳年下だということ。それに彼女がなぜ、日本舞踊を舞つていたのかを聞いた。

「おばあ様が、日本人の嗜みの一つだと言つて習わせるんです」まあ、本人を見る限り、自分なりに楽しんでやつているようだ、やらされているというわけではなさそうだ。

「ところで、あなたの名前は？」

おつと、そういうえば彼女に名前聞いといて、僕の名前を教えてなかつたな。

「僕は萩原秀一。この近くにある優成高校の一年生だよ」

「そうなんですか？ 私も同じですよ」

「あれ？ 友愛学園じゃないの？」

友愛学園といふのは、いわゆるお嬢様学校である。優成高校は、至つて普通の男女共学校で偏差値やスポーツの成績が高い訳でもない。

お嬢様の彼女が、この高校に来るメリットはないはずだ。

「いえ、おばあ様が社会勉強だからと言つて、私を友愛学園に入れなかつたんです」

「ふむ。なかなか、まともな考え方だな。お金持ちは珍しい。「じゃあ同じ学校だつたなら、どこかで会つたことがあつたかもしれないね」

「覚えて…ないんですね」

「えつ、なにを？」

「私達、面と向かつて会つたこと、あるんですよ?」

「…………」

全く覚えてなかつたりして。

それから彼女は、僕とどこで会つたかを話した。どうやら、今年の四月に、僕が図書室で辞書を探している時、彼女が本を探していく、場所がわからずに困つていたところを僕が助けたらしい。

「そうだつたんだ。ごめん、気づかなくて」

「いえ、いいんですよ。あつ、今何時か分かりますか?」

僕は携帯を見た。

「三時半…つてどこかな」

それを聞いた彼女はえつ、と小さく声をあげた。「ごめんなさい。

私、これから行くところがあるので、これで失礼します」

彼女は曲を流していたCDラジカセを持ち、立ち上がつた。

「それは残念だな」

僕は珍しく、本心を口に出した。正直彼女は、僕のタイプだ。肩に掛かる程度の黒く美しい髪、背は僕より少し低いぐらい。肌も白く、先ほど真つ赤になつていた頬も、健康的に少し赤い程度だつた。ちなみにスタイルは僕は気にしない。服装は、今はジャージだが、それは真夏に舞の練習をしていたからだろう。

「私と…」

「ん…?」

彼女が何か言つた気がした。だが、声が小さくて聞こえない。

「どうしたの？」

僕は聞いてみた。

「私と…また会いたいですか？」

彼女は小さく、消え入りそうな声でそう聞いた。顔はまた真っ赤になっていた。

「僕はまた会いたいと思ってる」

これまた、僕は本心で彼女に答える。

「そう…ですか」

そう呟いた彼女は、どこか嬉しそうだった。ところで、時間は大丈夫なのだろうか？

「あっ、本当にそろそろ行かないと…」

「残念だけど…また会おう」

僕は笑顔で言う。僕は笑顔を意図的にすることはないので、これも珍しいことだつた。

「はい、また会いましょう」

彼女は魅力的な笑顔でこう言つて、歩いて去つていった。

「ふう…緊張した」

基本的に僕は人と話すのは苦手である。それがタイプの女の子とならば、その緊張感は倍増する。しかし、彼女と話すためには堪えるしかなかつた。

「イタツ…はあ。腹が痛い」

彼女と話している間は、堪えられた腹痛も今は堪えきれない。僕は近くの公衆トイレに、腹を抱えつつ入つていった。

……彼女、やっぱりかわいいな。
そんなことを思いつつ。

第一話 彼女と僕（後書き）

読んでいただいた方に、感謝申し上げます。これからもよろしくお願いします。

第一話 お決まりのパターン

あの日は土曜日だった。だが、彼女——麻里はなぜ、あんな所で舞を舞つていたのだろう？　彼女はお金があるから、練習所のような所もあるのではないか。僕は土曜日の夜、ふとそう思った。同時に、今度会つたら聞いてみよう、と思つたのだった。

僕はただ彼女に、もう一度会いたいだけなかもしれない。

土日の一連休を経て、月曜日。今日から、また一週間が始まる。僕は起きると、すぐに階下に降りていった。リビングを覗くと、そこには猫が一匹。名前はサラ。ちなみに名前は僕がつけた。由来は、毛並みがサラサラしているという、ひどく単純な理由だ。

サラは青色のゴムボールで遊んでいた。僕は中に入り、サラを抱きかかえてやつた。サラは僕に慣れているから、暴れずに大人しく抱かれていた。僕はサラをダイニングまで運び、ご飯を食べさせることにした。

：いや、もちろん僕も食べるが。

ダイニングには、僕の兄である、萩原秀一がオヤジみたいに新聞を読んでいた。この秀一兄さんは、近くの教育大学の一一年生である。将来は、国語の教師になりたいらしい。

「秀一兄さん、おはようございます」

「ああ。おはよう、秀一」

秀一兄さんは、新聞から顔を上げずに言つ。本当にオヤジっぽい。とりあえずサラを膝の上に乗せ、イスに座つて、食事が運ばれてくるのを待つことにした。

10分待つたのに、何も出でこない。：おかしい。秀一兄さんはトーストを頬張つているのに、なぜ僕には何も出でこない？　僕は、

サラを椅子の上に乗せ、母がいるはずのキッチンに入つてみた。

誰もいない。テーブルに紙が乗つてている。僕は手に取つて読んでみた。

『秀一へ。私は実家に帰ることにします。あなたのお父さんと、やつて行く自信がなくなりました。あの人のことをよろしくね 母より』

……えつ？

「秀一兄さん」

僕はやつとのことで、声を出した。「「うん？ ビジウした、秀一」

「母さんは出ていったのですか？」

「ああ、らしいな。俺も起きて、その紙を見た時は驚いたさ」「連れ戻しに行かないんですか？」

秀一兄さんは、ため息をついて、

「これは俺達が行つたところで意味ないだろ？ 父さんが行かない、意味がない。まったく…あの父さんのことだから、また浮氣でもしたんだろ？」

呆れ混じりでそう言つた。

僕の父親、萩原秀二は、どうしようもない人である。

金こそは、ある程度あるが、浮氣癖が非常にひどく、今までに何度も離婚騒動があつたかわからない。しかし、毎回母は浮氣を許し、二度としないことを誓わせる。しかし父はそれを毎回破り、浮氣を繰り返した。母は可哀想な人だと思う。たぶん、浮氣を繰り返す父に愛想が足りてしまい、実家に帰つてしまつたのだろう。

「とりあえず学校行かないと… つて秀二は？」

もちろん、父親のことではない。僕の弟が父と同じ名前なのである。

「ああ、秀二なら、もう起きてる。今は部屋で、学校行く準備して

るよ

まあ、秀三も母がないことは知っているのだ。ひつ。

「パン、焼いといたから食つとけ」

ダイニングのテーブルの上に、トースト一枚乗つた皿があつた。僕はその内の一枚を取り、マーガリンを付けて食べる。

「ところで父さんは？」

「最近帰つてきてないな」

父は基本的に、家に帰つてくることが稀で、最後に家に帰つてきたのは、確か3ヶ月前だつたはずだ。なのになぜ、母はいきなり、父とはやつていけない、などと言つたのだろう？

「おい。とつとと飯食わないと、遅刻するぜ？」

「ああ、うん。わかつてます。サラにご飯あげといてください」

僕は思ったことを、記憶の片隅に留めておいた。

サクッ、とトーストを食べる。……少し焦げていた。

自転車で家を出た。まだ静まつている住宅街を疾走する。ここから学校まで、約20分。今から行つたら、ちょうどいい時間になるだろひつ。

秀三は家を出ただろうか。中一なのだから、真面目にやつて欲しい、と思つ僕。麗しい兄弟愛である。

秀一兄さんは午後から講義のはずだから、今はどうでもいい。とりあえず、僕は学校に向かつて、自転車を漕いだ。

学校に着くと、周りには途中まで、バスで来たと思われる、徒歩の生徒達でいっぱいだつた。僕はそんな中を自転車から降りて歩いていた。まだ朝だから、そこまで暑くはないが、軽く汗をかく程度に暑かつた。

肩を叩かれた。振り向くと、そこには僕の友人、天野速人あまのはやとが微笑んで、立つていた。

「おはよう。速人」

「おはようさん」

速人は朝から調子が悪そうだった。

ここで速人について、説明しておこう。速人は僕が中学生になつた時、同じクラスにいた。声を掛けたのは、向こうの方からだつた。

「お前、俺のこと、どう思つ?」

かなり唐突だつた。だが、僕は冷静に答えた。

「そうだな……見た目なら、ヤンキーに見えるな。いや……チンピラかな?」

今の速人は爽やかな好青年だが、昔は襟足も長く、ワックスで髪をツンツンに立てていたのである。

「やつぱりか。お前つて、外見で人を判断するようなやつか?」

「いや。僕は人間は内面が重要だと思っている。だからお前みたいに、ヤンキーっぽく見えても、僕は他の人と変わらずに接するだらうね」

僕のそのセリフを聞いた速人は、友達になろうと言つてきた。僕はもちろんOKした。

速人は面白いやつだつた。話してて、話のネタが尽きることもないし、語りが上手く、聞いてて飽きない。感じも良く、あつという間に速人はクラスの中心になつたのだった。

「つーか、今日の授業つてめんどくね?」

「そうかな? 普通だと思うけど」

「お前はどこかおかしいんだよ。今日は数学に英語があるんだぜ? 最悪だよ」

「僕はどっちも好きだから……」

「お前、人間じゃねえよ」

そんなどうでもいい話をしていると、自転車置き場に着いた。速人は先に行き、僕は自転車を置いて、教室に向かつた。

朝のホームルーム。先生が連絡事項を話していた。すると、「いじで、転校生を紹介する」「いじの時期に転校生? 有り得ないだろ、普通。作者、少しは考えてください。

「よし、入つてくれ

入つてきたのは、麻里だった。

「……ん? 僕より、年下じゃなかつたつ? というか、なんで転校生なんだ? 彼女は最初からこの学校に通つていたはずだ。

「皆さん、はじめまして。島津麻里といいます。これから迷惑をかけるかもしれません。よろしくお願ひします」

彼女の張りのある声が、教室に通る。僕以外のクラス全員が、歓迎の拍手を送つた。

「島津さんは、他県の高校から転校してきた。みんな仲良くしてやつてくれ。ところで席だが、萩原の隣になるからな」

「お約束だ。そして、クラスの男子から不平があがる。

「センセー、俺の隣にしてくださいよ。萩原の隣は危険ですよ」

そう言つたのは、速人だつた。自分勝手なやつだ。ほら、お前の隣の菅原さんが、ちょっと不機嫌になつてゐるぞ。菅原さんは速人のこと、好きだからなあ。

「バカ、お前の方が危ないだろ? が。萩原はまだまともだ。」

まだつて……僕はまともじゃないのだろ? 「大丈夫。アンタはまともだから

僕の前の白峰恭子しらみねきょうが言う。

「ありがとう。少しは救われた気分になるよ」

僕は礼を言った。

「じゃあ、島津さんは萩原の隣に座つてくれ。わからないことがあ

つたら、萩原に聞いてくれ。あいつなら、何とかしてくれるはずだ」「はい、わかりました」

無責任なこと言わないでくれ、独身の鮫原梶機先生。わかなはらかじきちなみに数学教師である。島津さんが、窓際の僕の隣の席に座る。「よろしくお願いします」

「……よろしく」

互いに挨拶を交わす。彼女は半分笑っていた。それを見た僕は外に目を向けた。

彼女に会えて嬉しい。

ただ、そつ思う僕であった。

第一話 お決まりのパターン（後書き）

今回も、読んでいただきありがとうございました。次も、出来るだけ早く完成させたいと思います。

第三話 真夏のカレー（前書き）

これから、暦では冬に向かっていきますが、この話は真夏の話です。
夏だと思いながら、読んでみてください。

第三話 真夏のカレー

昼休み。僕は速人と、昼御飯を食べに行くことにした。

「速人、昼どうする？」

僕は速人の席まで行つて声をかける。

「うーん。学食行くか

「そうだね」

僕と速人は、教室を出ようとした。すると、僕の肩が叩かれた。振り向くと、そこには島津さんがいた。

「どうしたの？」

僕は聞いた。すると彼女は、

「一緒に…お昼ご飯食べませんか？」

少し顔を赤くしながら、そう言った。

「いや、僕は速人と食べに行くから…」

僕は断ろいつとした。先約を優先するのは、当然なことだと思ったからだ。

「あ～、悪いな秀一。俺、用事思い出した」

いきなり速人が言った。

「えつ…」

「そんなわけで、俺は行く。さらばだ、秀一ー。その娘と仲良くやれよ！」

速人は、そう言って去つていった。その後ろ姿は、ビリとなく悲しげに見えた。

「どうか…あいつ、何か勘違いしてるような…」

「あのー」島津さんが様子を伺つようと言つ。

「あ、うん。速人もどこか行つちゃつたし、一緒にご飯食べに行かない？」

速人がいないなら、島津さんとお昼をともにしてもいいだろ？

そう思い、逆に誘つてみた。

「え、あ、はい。」一緒にしましょ「う

島津さんは笑顔で頷いた。

そして、僕と彼女は学食に行くために教室を出た。

「ここで先程、走り去った天野速人にスポットを当ててみよう。

俺は走っていた。ああ、目から何か出てるよ。涙だな、こりゃ。秀一のやうう、麻里ちゃんといつの間に、良い仲になつてしまつてゐんだよ、あの裏切り者が。

そんなことを考えつつ、たどり着いた先は屋上だった。

屋上というと、生徒に開放されていないケースが多いのだが、この学校は開放されていて、生徒達の憩いの場になつてゐる。しかし、真夏の太陽が降り注いでいる屋上に、生徒の姿は見えなかつた。まあ…暑いからねえ。

「ま、そりや そりやう…」

一人になるには好都合だ。俺はそこいら辺に寝転がつた。

「はあ…」

溜め息が出た。

秀一は、中学の時からの親友だ。まあ、向こうはまづ思つてゐるか知らないが。親友に彼女が出来たことは、實に喜ばしいことだ。でも、俺が一目惚れした娘じゃなくともいいだろう？

「はあ…」

授業、さぼるうかな……？ なんか面倒くさくなつてきた。昼寝でもしようとい、そのまま目をつぶつた瞬間、頭上から声が聞こえた。

「アンタ、何してんの？」

「うわっ！」

俺は目を開けた。見えたのは、青い空と俺を覗き込む幼なじみの顔。

白峰恭子。それがコイツの名前だった。

10年くらい前の話だ。俺が1人で砂場で遊んでいると、後ろからトントンと肩を叩いたやつがいた。振り向くと、そこには同じ年くらいの女の子がいた。

「なんか用？」

俺は無愛想に聞いた。あの時の俺は友達と喧嘩していたので、虫の居所が悪かったのである。

「アンタ、何してんの？」

彼女はなぜか知らないが偉そうだった。だから、俺は無視して砂遊びを続けようとした、が彼女は俺の手をつかんで、強引に俺を立たせた。

「何すんだよ」

俺は文句を言う。しかし、彼女はそれを無視して言った。

「ほら、かくれんぼするわよ」

当時、俺達がやっていたかくれんぼは、ハードなところがあった。それは、見つかった者は砂場に埋められるというものであった。つか、こんなルール作ったの誰だよ……

まあ、こんなルールがあつたから、俺が邪魔になつたのだろう。そのついでに、俺を参加させるつもりなのかもしれない。当時の俺は、そんな子供らしからぬことを考えた。

「嫌だよ。オレはここで遊ぶんだ」

俺は彼女に意地悪く言った。ただ彼女を困らせたかったのだ。

しかし…直後に俺は後悔した。そして、同時に理解した。彼女に余計なことは言わない方がいい、と。

「はあ？ アンタがそこにいるせいで、砂場に人を埋めらんないんでしょう？ 一言で言つと、アンタ邪魔なのよ！ だけど、私つて優しいから、仲間に入れてあげようとしてあげてるのに、何よアンタの態度！ ああ、もう腹立つわね！ みんな～！」

彼女は俺を散々に言つた後、かくれんぼに参加するメンバーをこの場に呼んで言った。

「『マイツ、埋めるわよー』

「…………」

みんな、不思議そうな顔をして黙った。それはそうだろう。いきなり、埋めると言われてもなあ……

「何してんの！ 埋めないと殺されるわよー！」

ねえ、誰に？ もしかして俺ですか？

「…………埋めようぜ」

誰が言つた。その声につられるように、他のやつも段々乗り気になつていく。

俺は彼女を振り切つて、逃げ出そうとした。しかし、彼女の力は意外と強く、離してくれない。無理やり離そうと思えば離せたが、女の子にそのような態度を取れない俺だった。

そして、俺は砂場に埋められた。今でも時々夢に出る。俺を見て、笑つてゐる彼女の顔が……

もう分かつてゐると思うが、『彼女』というのが恭子である。こいつは昔から変わらないのだ。

「何の用だ、恭子？」

俺は寝たまま恭子に言つた。

「アンタに用がある訳じゃないわよ。私はここで、『ご飯を食べよう』としただけ」

恭子は無愛想に言つた。

「なら、声掛けんなよ。俺は一人になりたい気分なんだ」

俺はそう言つて目を閉じた。こんな時に恭子と話すと、余計ネガティブになる。

「まったく、アンタつて昔から変わらないのね」

ああ、恭子も昔のことを思い出していたのか……

そう思いながら眠りについた。恭子が何か言つてゐるような気がしたが、気にしないことにした。

では、再び視点を萩原秀一に戻そう。

僕は学食名物、カレーライスの中辛を食べていた。隣には、カレーライスの甘口を食べている島津さんがいた。

どうでもいい話になるが、こここの学食のカレーライスは種類が豊富である。

まあ例を挙げるならば、ポークカレーにビーフカレー、チキンカレーなどである。しかも辛さの種類も、激辛 辛口 中辛 甘口 激甘という順で存在している。そのせいで、学食はカレーの匂いがす「」。見渡してみると、周りには男子連中しかいない。

……確かに、女の子はカレー臭がキツい学食にはこないよなあ……

「ねえ、島津さん？」

彼女は食べるのを中断して、僕の方を見て応える。

「なんですか、萩原さん？」

「ごめんね、こんなとこに連れてきちゃって」

僕は謝る。しかし彼女はそれを制して言ひ。

「とんでもないです。私、カレーは好きですから、ここに来れて嬉しいです」

「そう言つてくれるなら、僕も嬉しいけど……」

実際、まったく嬉しくない。自分の選択ミスに、激しく後悔する僕。

はあ……何してるんだ、僕。せっかく島津さんと一緒に昼食をとっているというのに、カレー臭がキツい学食を選んでしまうとは……購買で何か買つて、屋上で食べればよかつた。この時間なら、暑いから誰もいないだろうに。

というか、いきなり2人っきりになつてどうするんだ？ 逆に話しづらい気がする。

「萩原さん？」

色々と考えていた僕を、島津さんの声が現実に引き戻す。

「うわっ！ ど、どうかした、島津さん」

自分の世界から帰ってきた僕は、慌てて聞き返した。

「いえ、大したことではないんですけど、次の時間何かなあつて思つて」

「あ〜、僕の嫌いな国語だよ

「国語、嫌いなんですか？」

「うん、まあ…ね」

僕にとって、国語は文法が難しく、英語に比べて分かりづらい。いや、普通の人は英語の方が苦手だらうけど。

「じゃあ、好きな教科は何なんですか？」

島津さんが僕に質問する。

「僕は数学と英語が好きだよ」

朝、速人に言つたようなことを言つ。

「……変わつてますね」

反応も、速人と似たようなものだった。

……ちょっとショックだ。

話していて、気づかなかつたが、席が空くのを待つている人が多い。これはさつさと席を空けるべきだろ。

彼女のカレー皿を見ると、もう食べ終わつていた。

「そろそろ行こうか？」

僕は島津さんにそう言つた。

「そうですね。待つてている人もいるようですし」

僕と島津さんは、皿を学食のおばさんの元まで持つていき、学食を後にした。

そういうえば…今日は腹が痛まなかつた。たぶん、彼女と顔見知りになつたからだろ。僕の腹は、見知らぬ人と話すと痛くなるからなあ……要するに、困つた腹なのである。

放課後、僕は特に用事もないのに帰ることにした。教室を出ると、

速人に出くわした。

「やあ、速人。今日はどこでサボつてたんだ？」

速人は午後の授業に出でていなかつた。速人がサボるのは、そんなに珍しいことではないのである。

「ああ？ ああ…屋上だよ。ほら、顔、焼けてんだろう？ つい、うとうとと、寝ちまつてたんだ」

顔を見ると、確かに少し黒くなつていた。

「でもさ、何でわざわざ暑い屋上で寝てたんだ？」

僕は気になつたことを聞いた。

「なんとなくだよ、なんとなく。暑いのは苦じやないし」

「そりだつけ？」

速人は夏になると、暑い暑い、と騒がしかつた気がする。

「まあ、そういうことにしといてくれ。おつと、部活行かないと。

悪い、俺行くわ」

「あ、うん。じゃあまた明日」

速人は去つていつた。バスケ部なので、体育館に行くのだろう。僕は速人が角を曲がるのを見届けてから、昇降口に向かつた。

僕はベッドに体を投げ出した。

帰つてきてから、いつも母がやつていた家事を僕がした。正直、母の偉大さを思い知つた。ご飯づくりに、洗濯、掃除などを、いつも1人でやつていたことが信じられなかつた。

この時間、兄は家にいない。近くのビデオ店でバイトしているのである。弟は野球部に入つていて、つい先程帰つてきて、ご飯を食べる寝てしまつた。まあ、忙しいから仕方ないだろう。僕は何もやつてないから、家事をやるのが、ちょうどいいのかもしれない。

「そりだつけ、宿題あつたつけ…」

確かに、数学の教科書からだつたような…

そう思い、教科書を取ろうとして、立ち上ると、机の上に乗つていた携帯が震えた。

「……？ こんな時間だつてのに、誰だ？」

ぼやきつつ見てみると、速人だつた。電話に出る。

「よつ、秀一。元気してるか？」

速人の軽い声が聞こえてきた。

「元気じゃない、じゃあね」

僕は電話を切ろうとした。すると電話から、慌てた声が聞こえた。
「待て待て待て！ まだ切るなつて。聞きたいことあるんだからさ」

「じゃあ、早くしてくれ。僕は死にそつなんだ」
僕の瞼は、今にも閉じてしまいそうだつた。

「わかつたよ。正直に答えてくれ。お前と麻里ちゃんつて、付き合つてゐるのか？」

軽く目が覚めた。島津さんと僕が付き合つてゐるだつて？

「速人、それはない。付き合つてゐるわけないだろ。島津さんとは、
今日初めて会つたんだぜ？ いつそんなチャンスがあつたんだよ」
僕が言うと、速人はほつとしたように言つた。

「やっぱ、そうだよなあ。付き合つてゐるわけがないよな。うん。まあ、それだけだ。じゃあまた明日な」

勝手に切られた。ツーツーツーツーツーと音がする。僕は電源を切つて、宿題もやらずに、寝ることにした。

まったく、速人は何を言つてゐるんだか。僕が島津さんと付き合つてゐるわけないじゃないか。向こうは、僕のことなんか、気にしてもいらないだろうし。でも……
僕は眠りにつく直前に思つた。

島津さんと恋人同士になれたらしいな、といつ夢のよつなことを。

第三話 真夏のカレー（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。これからも精進していきますので、皆様よろしくお願いします。

第四話 キャンパスライフ（前書き）

今回は少し更新が遅れてしましました。とりあえず読んでみてください。

第四話 キャンパスライフ

「で、何を忘れたって？」

僕は秀一兄さんに聞き返す。受話器の向こうの兄は答えた。

「今日、締切のレポートだ。たぶん机の上に上がってるはずだから、こっちまで持ってきてくれ」

それを聞いた僕は、電話を切りたくなつた。しかし、兄が困つているのに見捨てるのは気が引ける。そう思い、結局僕は渋々承諾した。それを聞いた兄は僕にお礼をすると黙つて電話を切つた。

…まあ、期待しないでおこう。

僕は居間を出ると階段を登り、兄の部屋に入ると、思わず立ちすくんだ。理由を一言で言つと、その部屋が散らかっていたからだ。確かに母が出て行つてから、家事をしているのは僕だが、兄弟の部屋はまったく掃除していなかつた。

だからといって、ここまで汚くはならないだろう。床にはマンガが大量に散らばっていて、足の踏み場がない。衣服もそこらへんに放り投げられている。換気もしていないのでだろう、随分と埃っぽい。これを見て、母が僕達兄弟の部屋もしつかり掃除していたのを思い出した。僕もするべきなのだろうか。

まあ、それは後で考えるとして、今は兄のレポートを探さないと

…
僕は床の本を一部片付け、机までの道を作る。そして、机の上にレポートを発見した。

「これか……」

タイトルを見ると、『地球温暖化の抑止法』と書いてある。僕は興味を持ち、レポートを見てみることにした。

『今、この世界は危機に晒されています。地球上の温度は上がる一方で、このままでは様々な自然災害が起こり、人類…いや、全ての生物が死滅してしまうかもしれません』

うん、出だしはまともだな。

『では、地球温暖化を止めるにはどうするべきでしょう。私は考えました。人間がこの世からいなくなればいい』
何かおかしくなってきた…

『人間さえいなくなれば、残るのは他の生物たちです。彼らだけなら、これ以上地球温暖化が進むことはありません。では、如何にして人間を滅亡』

僕は読むのをやめた。兄は頭がおかしいんじゃないかと思わざるを得ない文章だった。

このレポートを提出する兄に幸運あれ。

今日は土曜日。島津さんに初めて会ったのは、一週間前になる。そして、僕は兄の通っている教育大学に来ていた。現在、12時35分。ちょうど昼休みくらいだろう。僕は校門前で兄にメールで着いたことを伝えた後、敷地内に入り、近くのベンチに座つて待つことにした。

少しして、兄の声が聞こえた。

「お~い、秀一~」

僕は声がした方向を向いた。そこには兄の他に、もう1人いた。女人の人だろうか。いや、男かもしれない。中性的な顔つきをしていて、どちらかはわかりかねる。髪から判断しようと思ったが、今の時代、男が長髪にしてもおかしくないので、判別しづらい。だが、この人が男だろうが、女だろうが、美しいことに変わりはなかった。

……またぶん女人の人だと思うけど。

「悪かったな、秀一。家のことで忙しいのに」

兄が僕を労うように言う。

「いや別にいいよ。ちょうど外に出たかつた頃だしさ

無論、嘘である。はあ…休日はゆっくりしたかったのに…

「そうか…それならいいが」

兄はそう言つて、僕を見る。そして僕が、自分の隣にいる人を見ているのに気づいたようだつた。

「おお、紹介してなかつたな。こいつは、椎名景しいなひかづだ。時々、女に聞違えられるんだが、一応男だからな」

男だつたか…う～ん、女人だと思つたんだけどな。

景さんが僕に話しかける。

「へえ～、君が弟さんか～。話は秀一から聞いてるよ。よろしく、秀一君」

「ひちらひそ、不出来な兄がお世話になつていてます」

僕はまともな挨拶を返す。

「おいおいひどいな、秀一」

兄が何か言つているが気にしない。

「いや、それはもうわかつてるんだけどね」

「景までそんなことを言つのか…」

兄は落ち込んでいた。景さんはそれを無視して、話を続ける。

「そついえば秀一のレポート、持つてきたんだよね？」

「ええ、しつかりと持つてきます」

「ちょっと貸してくれるかな？」

僕はレポートを渡した。景さんが内容を確認して一言。

「書き直せ！」

まあ普通の人なら、そう言つだらう。

「なぜだ？ 僕は至つて眞面目に書いたぞ」

「地球のこと考え過ぎだろ…」

景さんは頭を抱えていた。

「ごめんなさい」

とりあえず、謝つておいた。

「いや、秀一君は悪くないよ。すべては秀一が悪いんだ」

「ああ、兄は良い学友に恵まれたようだ。景さん、これからも兄をよろしくお願ひします。」

景さんは兄を連れて、図書館に戻つていった。どうやら、無理やり書き直せるみたいだつた。大学生は大変だな、とかなんとか思つてゐると、景さんが戻つてきた。

「はあ…、何とかなりそうだよ」

景さんは憔悴しきつていた。僕は聞く。

「兄一人で大丈夫なんですか？」

今までの経験上、兄が素直に言つことを聞くとは思えないのだが。「ああ、その辺は問題ないよ。レポートを書き直せば、今度、昼飯をおじつてやる約束をしたから。意外と秀一は単純なんだよね」「でも、物事に集中し過ぎて、その約束の内容を忘れちゃうんですね」

そうそう、と景さんが苦笑する。

現在、兄の大学の成績はほぼ『良』だが、高校時代は学校全体でベスト10に入るほど頭が良かつた。それは兄が遊んだりもせず、勉強しかしていなかつたためである。まあ、努力の賜物というわけだ。

しかし、大学1年の時に、兄の集中の対象は勉強から、遊びに変わつてしまつたのである。遊びに集中してしまつた兄の成績が下がるのは当然だつた。

遊ぶのは簡単だが、遊びを止めるのは難しいといつことだが、兄を見るとよくわかる。

「ちょっと気になつたんだけど、秀一の記憶力つて、悪過ぎじゃないかな？ 秀一には直接聞いたことはないんだけど、秀一君はどう思つ？」

景さんが僕に質問してくる。僕は少し迷う。話すべきなんだろうか……さつまでは忘れっぽいで済ませたけど、今はそれでは済まない気がする。

「うん？ なんか変なこと訊いたかい？」

「いや、そんなことないんですけど……兄からは本当に聞いてない

「ですか？」

景さんは首を振る。

兄が教えてないのに、僕が教えてしまっていいのだろうか？ 僕はそう思い、口を閉ざした。しかし、景さんはそんな僕を見たにも関わらず、さらに訊いてくる。

「秀一のこと、教えてくれないかな？」

「……」

僕は黙つている。しかし、景さんはさらに続けて言った。

「親友だから、聞いておきたいんだ」

この人には。この人には、話しても良いんじゃないか。ただそう思つた。

僕は兄に何か言わることを承知で景さんに話しておくれことじた。

「兄は…後天的な記憶障害者なんです」

「……」

僕がそう告げても、景さんは黙つて聞いていた。僕は話を続ける。「兄が障害を負つたのは、小六の時です。ある日、兄は家の近くの公園で遊んでいて、アスレチックジムに登つっていました。一番上まで登つた兄はそこから滑り落ちて、頭を打つてしまつたんです」

僕は一息つく。しかし、すぐに話を進める。

「まあ、たまたま近くを通りがかつた、僕の家の隣に住んでいる方が、兄を見て、すぐに救急車を呼んでくれたんですけど…」

「秀一は大怪我でもしたのかい？」

「いえ、ただの脳震盪で、入院もせずに帰つてきましたね」

その時のことは覚えている。兄と母が帰つてきた時、僕は玄関で出迎えた。兄の頭には包帯が巻かれていて、とても痛々しそうだった。

「兄はその頃から、記憶力が悪くなりました。例えば、僕とつい先程した約束を忘れたり、母に頼まれた買い物をするのを忘れるとか

です。小一なら、わからなくもありませんが、小六の兄ならば、異常でしかありません。母は兄を精神科に連れてきました

「そして記憶障害だと……」

「まあ、厳密に言つと違つんですよね。物事を『記憶』できなくなつたのではなく、物事に『集中』し過ぎてしまい、他の事が脳から消えていつてしまうんです。でも都合の良いことに、人の名前や外見くらいは覚えているみたいですから」

「本当に都合良いね」

景さんが言うが、別に僕はどうでも良かつたので答えなかつた。こんななの作者の都合に決まつてゐるじゃないか。そう思いつつ、話を修正する。

「兄は猛勉強を始めました。一つのことを勉学に絞つたんです。その勉強量に比例して、兄と僕らが遊ぶことは、次第に無くなつていきました。それに、友達もだんだん減り、最終的には兄をいじめたりするようになりました」

景さんの表情が少し暗いように見えたが、僕は構わず話を続ける。「兄が遊び始めたのは、大学生になつてからです。まあ、気の合う友人でも出来たんでしょう」

「うん？ それってボクのことかな？」

景さんは確認するように聞いた。僕は無言で頷き、

「たぶんそうでしょう。景さん、こんな兄でも親友でいてあげてくれませんか？」

そう締めくくつた。

景さんは黙つていた。やはり言わない方が良かつたのか……僕が後悔しかけた時、景さんは口を開いた。

「秀一君、それは無理だよ」

「そうですね……やっぱり……」

僕が落胆した声で言うと、景さんは笑顔で続けた。

「だって、僕と秀一は一生親友なんだからさ。『いてあげて』とか言われても意味ないよ」

僕はこの人に謝りたくなった。一度だけとはいえ、疑つてしまつたことを。まったく……自分で自分を情けなく思う。

「バカだな、秀一君は。僕がその話を聞かされて、友達を辞めたりすると思うのかい？ まあ、前例があつたりしたから、疑うんだうつけどさ」

兄は今まで、友達は一人もいなかつた。学校で勉強をずっとしてゐる兄が友達を作れるわけがない。兄は友人関係を捨てて、勉強のみを追求していたのだから。

「景さん、すみませー」

「謝らなくとも良いよ。僕は気にしてないしね」

僕は謝まろうとしたが、景さんは僕を制してそう言つた。
うん。この人になら、兄を任せられる。……って、なんかブラコンの妹みたいなこと言つてるな僕……

それから、僕と景さんは昼休み終了五分前まで話していた。兄のことや、僕のこと。それに景さんについても聞いた。話している最中、景さんはとても楽しそうだった。もちろん、僕も楽しんでいた。だが、話している内に、僕の頭に引っかかるものがあつた。しかし、それが何なのかはわからない。

「おつと、もうこんな時間か。そろそろ行かないと」
景さんがそう言つて立ち上がつた。僕も立ち上がる。

「じゃあ、まだどこかで」

「あつ、すみません。最後に一つ、教えてくれませんか？」

景さんが戻ろうとした時、僕は景さんを引き留めた。

「うん、別にいいけど……何かな？」

振り返つた景さんに僕は訊いた。

「兄のことをどう思います？」

景さんはその質問に少し驚いたようだつたが、すぐに答えた。

「僕にとって、秀一は大切な人だよ」

景さんはそう言つて、構内に戻つていつた。兄の様子でも見に行

くのかもしれない。僕は再びベンチに腰掛ける。

「景さん…か」

呟いて、先ほど引っかかったことがなんなのか考える。

「ああ、そうか」

そのことがわかった僕は、思わずそう言つていた。講義があるからだろう、周りには誰もいなかつた。

僕は帰ることにした。用事が済んでしまった以上、ここにいる意味はない。自転車に乗り、その場を離れる。

まあ、また景さんに会うときがあれば訊いてみよう。そう思つて、僕は家に帰つていった。

第四話 キャンパスライフ（後書き）

次の話も同じ日の話です。

第五話 サブの恋愛事情（前書き）

皆さん、お久しぶりです。更新が異常に遅くなりました。すいませんでした。今度はできるだけ早くします。

第五話 サブの恋愛事情

僕は家に戻つてきいていた。あれから、そのまま遊びに行こうとも考えたのだが、家事が残つてることに気づいたためである。…最近、僕は主夫化してきているような気がする…

自転車を物置に強引に入れると、僕は玄関に向かいつつ、鍵を取り出した。そして鍵を差し込みひねつたが、手応えがない。

「鍵…かけた、よな？」

試しにドアを少し開けてみる。ガチャリと、ドアが少し開く。

…まさか、泥棒じゃ？ そう思つた僕は、思い切つて中に入ることにした。ドアノブをつかむ。そして、心の中でカウントダウンを始める。

3…2…1…0！ 僕はドアを一気に開けた。手応えが全くなかった。そして、中から何かが飛び出してきて、見事なヘッドスライディングを決めた。まあ、転んだのだろう。

僕は何も言えなかつた。転んだ人を見ると、どうやら女の子のようだつた。勿論、僕の家に女の子はいない。強いて挙げるならば母だが、今は実家に帰つている。じゃあ、この女の子は誰なんだろう？ そう疑問に思つた時、家の中から大きな声が聞こえた。

「待つて、由香里！ 僕が悪かつたからさー！」

この声は…秀三だ。あいつは、今日部活だったはずなのに、なんで家にいるんだろう？ 家の中から、小柄な少年が出てきた。秀三である。

「由香里、大丈夫か？」

そう言つて、秀三は由香里という女の子を起きあがらせる。由香里の服はかなり汚れていた。由香里は黙つている。というか、怒つているように見えるのは僕だけだろうか？ そんな様子に気づいていない秀三はさらに話しかけた。

「大丈夫か、由香里。俺が悪かつたよ。まあ戻るわぜ」

手を取つた瞬間にパンチと、いい音がした。由香里が秀三の手を振りほどき、反対側の手で平手打ちを食らわせたのである。叩かれた秀三は呆然としていた。

「この…変態！」

秀三にそう言い放ち、由香里は逃げるように帰つていった。秀三は雰囲気の読めない奴だな。とりあえず、僕は秀三に話しかけた。

「おい、秀三」

しかし、反応がない。目の前で手を振つてみるが、これにも反応がなかつた。僕は本気で秀三の顔を殴つてみた。ドムッ！ と鈍い音がして、秀三が玄関先に崩れ落ちた。我ながら良いパンチだつた。僕が自己満足していると、秀三がムクリと立ち上がつた。

「おお、秀三。気が付いたか」

僕は反応を取り戻した秀三に喜びを覚えた。秀三は下を向いていた。

「そうだ、お前今日部活じゃなかつたのか？」

秀三は答えない。

「お前、またサボつたのか。サボリはよくないぞ」

秀三はまた答えない。

「まったく…女の子を家に連れ込むなんて……ところで、あの子は彼女か？ お前、そのところを聞かせてもらひうからな

「兄貴、ちょっといいかな？」

秀三がこちらに歩いてくる。僕は黙つて待つていた。やがて、秀三が僕の前に立つ。そして、僕の鳩尾に秀三の拳がめり込んだ。

「ぐえつ！」

思わず蛙のような声を出してしまつ。呼吸が止まりそうになるほどの衝撃だつた。僕は倒れこむ。秀三が笑いながら言つた。

「なあ、兄貴よ。俺は機嫌が悪いんだ。何故かわかるか？」

僕は痛みに耐えつつ、首を振る。そんな僕を見て、秀三は顔をしかめて言つう。

「由香里は帰つちまうわ、誰かにいきなり顔殴られるしよ。これで機嫌良かつたらおかしいだろ?」

「まあ、確かにそうだな。僕が悪かつた、すまない」

そんな僕を見た秀三は、ハアッと溜め息を吐いて呆れたよう

「兄貴は怒んねえのかよ?」

と訊いた。僕は何のことだかわからなかつたので首を傾げる。

「俺は兄貴を殴つたんだぜ? 普通は殴り返したり、キレたりとかしないのか?」

「別に。まあ、確かに僕だつて殴られたのは腹立つけど、先に殴つたのは僕だからね。それにはいくら兄弟とはいえ、プライバシーに首を突つ込むのはよくなかった。結局、悪いのは僕なんだよ」

それを聞いた秀三は頭を抱えて、何か呟いていた。残念なことに聞こえなかつたが。

僕は立ち上がり、秀三をその場に置いて、家の中に入つていつた。さあて、掃除でもしよう。

玄関前では不審者のように、秀三がブツブツと呟いていた。近所の人達もそれを見て、コソコソと話していた。ウワサになることは間違いなさそうだった。

一日が終わる。明日もゆっくりできると思い、目覚まし時計はかけないでおおく。僕はベッドの上に置きっぱなしの携帯を取り、画面を見る。

「んつ……? メール来てんじゃん」

内容を見ると、どうやら速人からのようだ。明日、駅前に十時集合らしい。僕は、わかつたと短いメールを返した。そして、目覚まし時計を八時にセットする。電気を消し、枕元にセットした目覚まし時計を置いて、ベッドに横になる。

ふと、父さんのことを考えた。父さんはどこで、何をしているのだろう? 浮氣相手とどこかのホテルにいるのか、もしくは母の実家にいるのか。どちらにしても、連絡くらいはして欲しい。そう思

つた時、僕は眠りに落ちた。

その頃、秀三は自分の部屋で携帯を手に取り、何度も何度も電話やメールをしていたが、いずれも返答はなかった。

「くそつ！ 由香里の奴、シカトしやがって……」

腹が立つた秀三は携帯を叩きつけようとしたが、かろうじて思いとどまつた。

秀三は携帯をベッドに放り出した。そして床に座り、由香里のことを考える。

「やっぱ、早すぎたかなあ……」

思わず呟いてしまう。秀三が由香里と付き合って始めたのは、今から一週間前のことだった……

放課後、秀三は友達に呼び出され、屋上に向かっていた。どういう訳か知らないが、その呼び出しが口頭ではなく、メールで伝えられた。

「同じクラスなんだから、口で伝えろよな……まあ、その場じや言えないようなことだつたんだろうがよ」

そして、屋上のドアの前に立つ。秀三はノブに手を掛け、ゆっくりと回し、そのまま引いた。ギィ～と鑄び付いていたドアが開く。夏にしては、爽やかな風が吹いていた。夕焼けに染まる空、思わず眩しくて、目を閉ざす。

「来て……くれたんだ」

そんな声が、光の射す方から聞こえた。秀三はそちらの方を見ようとするが、目を開けることはできなかつた。

「誰だ？」

秀三は友人ではない声に驚きつつも訊く。

「由香里だよ、サブ」

ちなみにサブといつのは、秀三のあだ名である。もちろん『二』から来ているものだ。

「由香里？… アイツは… どうした？」

「来ないよ。私はアイツに携帯借りただけ」

由香里が笑いながら言つ。アイツ、確かに由香里のこと、好きだつたよな……。秀三は友人のことを可哀想だと思つた。

太陽が雲に隠れ、由香里の顔が見えた。いつも通り、由香里は綺麗だつた。さすが入学当初、クラス一番人気になつただけはあつた。

由香里と今のような関係になつたのは、中一の時だつた。

何人かで話をしていた際に、秀三と由香里のみわかる話題が出たことがきっかけだつた。

それから由香里と話すようになつた秀三は、いつしか、由香里のことを好きになつていた。その気持ちは今も変わらない。しかし、その気持ちは表に出さなかつた。ただ単純に、ふられるのが怖かつた。

だから友達でいようと思つた。二人は友達という関係で、今までやつてきた。

しかし最近、由香里への気持しが抑えきれなくなつてきた秀三は、緊張しつつも、由香里が話し出すのを待つた。そして由香里が口を開く。

「いきなり呼んだりして、『ごめん』

「いや、別にいい…けど…」

いつもと調子が違う由香里に戸惑いを覚えた秀三は、

「お前、なんかおかしくね？」

思わず、そう聞き返していた。

「い、いや？ なんにもおかしくないよ？」

「嘘つけ。声が裏返つてるし、少し噛んだじゃねえか」

しかも、この態度は由香里が秀三以外の生徒に使うものだ。つまり、普段は猫かぶりをしているのである。

「無理してんじゃねえよ、お前らしくない。言いたい」とは、ストレートに言え、ストレートに」

秀三はできるだけ、軽い調子でそう言った。

「ひるさいわね！ ちょっと黙つて！ 私にだつて、心の準備つてものがあるんだからー」

「心の準備、ねえ……？」

秀三は由香里の言いたいことがわかつた気がした。場所、状況からいつて間違いない。…由香里は告白する気なのだろう。落ちついた由香里は口を開いた。

「あのさ…、私、サブのことがーー」

「由香里…、好きだー！」

由香里が言い終わる前に、秀三は叫んでいた。今まで抑えていた気持ちを解き放つよ。

太陽が顔を出し、再び由香里がオレンジ色の光に包まれる。だが、秀三は目を由香里に向け、真っ直ぐ歩いていく。由香里の前まで行くと、由香里は泣いていた。見えた。

「由香里、好きだ」

秀三は赤くなつた顔でもう一度言つたが、由香里は何も言わなかつた。

「由香里？」

秀三は心配になつて声をかける。由香里はようやく口を開く。

「…バカ

「バカってなんだよ、おい」

少し腹が立つた秀三。しかし、由香里は違うのと首を振つた。

「私から、先に言つたかったな…って」

秀三は顔がさらに赤くなる。そう思つてくれることが嬉しかつた。

「私も好きだよ、サブ」

その言葉を聞いた秀三は、またさらに恥ずかしくなり、後ろを向いた。そして、一緒に帰ろうぜと言つたが、

「一緒に帰ろうよ」

由香里がそう言つた。こんな些細な同調がとても心地よかつた。

そして秀三は黙つてドアまで歩きだした。それに続く由香里は秀三の20センチ後方にいた。今はこれでいい、秀三は思つ。これからこの距離が狭めていけばいいのだ。何も焦る必要はない、そう考えをまとめた秀三は、由香里とともに屋上を出た。

一人の夏は始まつたばかりだったのだが……

「はあ……」

秀三は思い返したところで、溜め息をついた。あの時はこんなことになるなんて、思つてもいなかつた。

「キスとか、まだ早かつたな」

そう呟いた時、秀三の携帯から、軽快なポップ調の曲が聞こえた。秀三は携帯を急いで手に取り、着信相手を見た。由香里である。電話の通話ボタンを押し、電話にでる。

「もしもし……」

由香里の元気のない声が聞こえた。

「由香里、『ごめんな』

秀三はすぐに謝つた。自分が悪いのは理解していた。

「サブ……違うよ。私も悪かつたの」

「何言ってんだよ。悪いのは俺だろ？　お前は悪くない」

「違う！　私はサブのことが好きなのに、サブが私にキスをしようとした時、私怖かった」

秀三は黙つて聞いている。由香里の本心が知りたかった。

「怖くて怖くて、仕方なかつた。なんだかサブが『男』なんだつて、再確認させられた感じだつた。『ごめんな、サブ』

由香里は泣いていた。秀三は由香里を泣かせたことを後悔した。しかし後悔ばかりもしていられない。

「なあ、由香里」

呼びかけるが、由香里に返事はない。秀三は構わずに話を続ける。

「怖くて、当然なんだ」

「えつ……？」

「どんなに愛していても、怖い時は怖い。それが普通なんだ」秀二は自分なりに、由香里を納得させるように話していた。

「もちろん、そう考えない人もいるかもしれない。でも、少なくとも俺はそう思う。だから、由香里は悪くない」

「サブ、……」

「悪いのは俺だ。お前が怖いと思っていたことに気づきもしなかつた。自分の欲望を優先した。だから、『ごめん由香里』

由香里は黙つていたが、やがて口を開いた。

「もういいよ、サブ。私は気にしてないしさ。私のことを好きつて思つていたから、キスしようとしたんでしょ？ それならいいよ」

「由香里……」

いひして一人は仲直りした。そして……

「十一時に駅前だからね。遅れないように。遅刻したら、何かおごつてもらつかり」

一人は『テー』トをするよつて、由香里は秀二に念を押す。秀二は何度も返事をしていた。

ちなみに長兄の秀一の明日の予定は、景とゲーセンに行く約束をしていた。集合時間は駅前に十一時。

兄弟三人の日曜日は忙しくなりそうだった。

第五話 サブの恋愛事情（後書き）

次は日曜日の話です。誰にスポットが当たるんでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1724b/>

君と行く明日。

2010年10月10日11時45分発行